

三条瀬戸物屋町出土軟質施釉陶器の論点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑中, 英二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000305

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



三条瀬戸物屋町出土軟質施釉陶器の論点

Issues Concerning Soft Glazed Pottery Excavated in Sanjo Setomonoya Town

Eiji Hatanaka 畑中 英二

1. 桃山時代における軟質施釉陶器

(1) 桃山陶器の中の軟質施釉陶器

見出された軟質施釉陶器

1987年から88年にかけて実施された京都市弁慶石町における発掘調査で信楽や備前をはじめとする桃山茶陶が大量に出土した。それまでに京都市内の発掘調査において桃山茶陶が出土することはあったが、それを凌駕する量であり、研究者の耳目を集めた。このことを受けて、1989年3月から根津美術館にて「桃山の茶陶」展が開催され、桃山茶陶の出土品に注目が集まった（根津美術館1989）。弁慶石町の発掘調査の後、近隣の中之町、下白山町、福長町、油屋町において発掘調査や立会調査が実施され大量の桃山茶陶が出土した。

当該地点には、慶長年間末頃の成立とされる『洛中洛外図屏風』（勝興寺本）に、寺町の木戸から三条通を西に入ったあたりに屋根にうだつがある間口二間程の瀬戸物屋が隣り合って描かれている。このほかに、成立年次や場所は明らかではないが『洛中洛外図屏風』（福岡市本）にも棚組に陶磁器を並べた店が描かれている。また、寛永元年成立の『京都図屏風』や、寛永元年から三年刊行の『都記』には、三条通の麴屋町西入るに「せと物や町」との記載がある（図1）。中之町には糸割符商人で唐物屋も営んだといわれる有来新兵衛の屋敷跡があり、享保年間に多量の茶陶類が出土したことが知られている。「せと物や町」は、まさに桃山陶器が大量に出土した地点にほぼ相当する。それ故、この記載は、桃山時代の陶磁器がまとまって出土する遺構の背景を傍証するものであり、これらが瀬戸物屋に由来することを示唆するものとなる。このことからこれらの地点を「三条瀬戸物屋町」と呼称するようになる（図2）（畑中2019）。

同年4月に刊行された『陶説』において「洛中出土の

茶陶」が特集され、轆轤成形された低火度釉の「施釉軟質陶器」が出土しており楽茶碗との共通点もある「初期



図1 『都記』にみえる「せと物や町」

京都大学附属図書館蔵

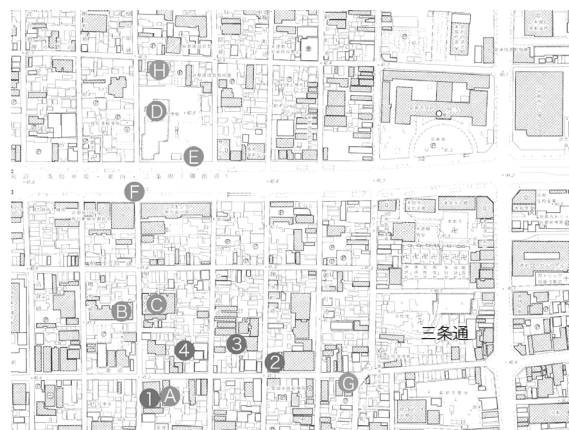


図2 三条周辺の陶器大量出土地点

（平尾2018より転載）

- 1 中之町 2 弁慶石町 3 下白山町 4 福長町
- A 新兵衛屋敷 B、C 油屋町
- D～F 軟質施釉陶器素地出土地点
- G 洛中絵図に描かれた陶器屋の位置
- H 押小路焼（陶工必用）

京焼」と呼びうるものがあると小森俊寛氏が指摘した(小森 1989)。編集後記に村上武氏が「こんな作品はどこに伝世しているのだろうか」(村上 1989)と述べているように、伝世品には見当たらないものであった。

定義づけされた軟質施釉陶器

小森氏による「施釉軟質陶器」の提言以降、研究の俎上に上がるようになり、松尾信裕氏は 1993 年の「大阪出土の桃山陶器」の中で「軟質陶器」(松尾 1993)、1996 年には第 92 回京都市文化財講座で永田信一氏が口頭ではあるが「軟質施釉陶器」(永田 2004)、1999 年に鈴木裕子氏が「もう一つの織部—軟質施釉陶器—」(鈴木 1999)で「軟質施釉陶器」と呼称しており、1990 年代後半には名称は定着したと言える。

多くの研究者に取り上げられる中で、「軟質施釉陶器」とは何か、が議論されるようになった。森村健一氏が説くように、土器のように柔らかく低火度の黒や赤(厳密には素地の赤色が透けて見える透明の釉薬)の釉薬を掛けた文様のないものというものが一般的な理解となった(森村 2000)。ただし、後述する三条瀬戸物屋町の弁慶石町や中之町からは素焼きの素地に白泥を掛けたもの(未製品)が出土しているほか、釉薬で図文を描いたものもや緑・黄・褐色の釉薬を掛けたものも出土している。また、樂吉左衛門氏が説くように大きくは軟質施釉陶器の範疇に入れられる黒楽は高火度焼成であり(樂 2001)、厳密にはその範疇には入らない。佐藤隆氏は豊臣前期に黒や透明釉が先行して登場し白化粧や緑釉などは豊臣後期に盛行するとし、黒楽を除くと軟質の素地を用いた鉛釉陶であると定義づけている(佐藤 2004)。

(2) 桃山時代における軟質施釉陶器の論点

研究の現状

現時点において出土年代が最も遡るのは慶長 3 年(1598)の大阪城三の丸普請に伴う盛土層の下から出土する事例があることからそれ以前には生産が始まっていたとすることができる(森 2000)¹。伏見では伏見城下町(T 地点)において慶長 10 年(1605)の焼土層に伴うものを最も遡るものとする。京都の事例は詳細が明らかではないものが多いが、慶長年間後半以降のものである。軟質施釉陶器の出現年代については天正年間に遡り、その場所については京都ではなく大坂であった可能性を想定されている(尾野 2004)。

この種の軟質の素地に鉛釉を掛けるものとしては日本列島においては奈良三彩や平安時代の緑釉陶器があるが、あまりにも時間の隔たりがあるので直接的な関係は想定し難い。16～17 世紀の遺跡からしばしば出土し、伝世品も存在する鉛釉陶器である華南三彩との関わりが想定されている。これには釉下に白泥(白化粧)を掛ける

手法が共通している(尾野 2004)。

これらの軟質施釉陶器の形態や編年は、出土量が豊富な大坂での在り方が参考になる(佐藤 2004)。豊臣前期(文禄年間を中心とする)においては内外面黒釉の黒楽と、赤褐色系の土に透明釉を掛けた所謂赤楽である。黒楽は碗が多く稀に向付がみられ、赤楽は碗が少なく香炉や蓋、灰匙などがみられる。また、後続する豊臣後期(慶長年間)で盛行する白化粧の碗はこの段階で出現するが、文様がなかったようである。豊臣後期には白化粧・緑彩を施し内面に黒釉を掛ける碗や白化粧は施さないが内外面の釉を掛け分ける碗など多様な組み合わせが見られる。黒楽と赤楽はみられるものの量を減じている。

軟質施釉陶器を焼成した窯そのものはみいだされていない。しかし、これらを焼成する内窯は規模が小さいことから屋敷地内でも窯を設置ことが可能であることと地下に掘り込むことがないことから、その実態を明らかにすることは困難である(木立 2004)。とはいえ、窯道具や素地が出土することから、その存在を想定することは容易である。本稿で対象とする 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけては大坂と京都で生産されていた痕跡を見出すことができ、堺においても特徴的な陶片(鉢・灰器・二彩碗)が出土していることから、窯は各所に設けられていたと考えるのが穏当であろう(佐藤 2004)。

青織部風の軟質施釉陶器が美濃産青織部の祖形であった可能性が指摘されている。美濃産青織部は豊臣前期にはみられず同後期において僅かにみられはじめるもので、慶長年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられている弁慶石町において青織部風の軟質施釉陶器が出土している。軟質施釉陶器が量産に不向きである一方、美濃産陶器が量産的であると考えるところから如上の指摘となる(尾野 2004)。極めて重要な視点であるが、そもそも前後関係を論じることが可能な年代幅にはないこともあり、議論することそのものが難しい。

冒頭に挙げた村上武氏の言にあるように、この時期の軟質施釉陶器(楽を除く)は基本的に伝世していない。この時期に現れる桃山陶器は近代に入って再評価されたものの、全てが珍重されなかったものの一つであると捉えておくべきであろう。

これは微細な年代観にも関わってくる問題であるが、軟質施釉陶器が先行してその影響を受けて青織部が登場したと考えるか、その逆と考えるかで、軟質施釉陶器の評価が大きく変わってくる。

本稿でのねらい

本稿では、桃山陶器の販売を行っていたと考えられる三条瀬戸物屋町から出土した軟質施釉陶器を取り上げる。一地点から一定量の軟質施釉陶器が出土しているにもかかわらず現時点までにその点に焦点が当てられたこ

となない。当然のことながら遺跡の具体像や陶片の様相を合わせて検討されたこともない。そこで遺跡の在り方からこれらの陶片を評価し、軟質施釉陶器の特質を明らかにすることを目的とする。

2. 三条瀬戸物屋町出土軟質施釉陶器の事例

ここでは、三条瀬戸物屋町のうち軟質施釉陶器が一定量出土している弁慶石町と中之町を取り上げることとする。

(1) 弁慶石町

弁慶石町の概要

昭和 62 年度 (1987) に商業ビル建設に伴う発掘調査において、三条通に面した間口の大きい町家と裏手の座敷、釜屋、庭と考えられる遺構が検出された。裏庭に位置する大規模な土坑 (SK41、76、77) を中心に桃山時代の茶陶が大量に出土した。後述するように遺構間で接合する陶片が多かったことから、同時期に廃棄されたと判断されている (西森 2018)。ほぼ関係に復元できる個体であっても、器の上下に融着痕跡があり、かつまた底部が抜けている (細片化して復元不可能だったもの) ことから、窯出しの状態でごここに持ち込まれて選別されたものと考えられる (畑中 2019a)。

陶片は、信楽・備前の焼締陶器が約半数を占める。他には美濃、唐津、軟質施釉陶器があり、他には中国、朝鮮からの輸入陶磁器もある。信楽は、水指が 30 個体以上あり、他に花入や鉢がみられる。備前は、水指・建水・徳利・壺・甕・火入・鉢・皿・茶入・合子・沓茶碗などがみられる。美濃は、瀬戸黒茶碗・黄瀬戸 (鉢・向付・香炉・杯・皿)・志野 (茶碗・茶入蓋・皿・向付・鉢) などがみられる。唐津は沓茶碗・香炉・皿・向付、土師器皿がみられる。本稿で取り上げる軟質施釉陶器は、茶碗・茶入・香炉・杯のほか青織部風の平向付に加えて焼成前の素地や匣鉢もみられる。

土師器の年代観などから慶長年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられている (尾野・平尾 2018) ²⁾。

弁慶石町出土の軟質施釉陶器

弁慶石町から出土した軟質施釉陶器には以下のものがある。その概要についてふれることとする (図 3)。

白化粧緑彩茶碗 (105、108 ~ 114、117 ~ 119、121、127、128)

白釉緑彩茶碗 (120)

褐釉茶碗 (115)

黒釉茶碗 (123)

茶碗素地 (124 ~ 126)

緑釉茶入 (106)

白化粧緑彩香炉 (116)

青織部風平向付 (107)

緑釉平向付 (129)

白釉杯 (122)

匣鉢 (130)

このようにみても、茶碗が大半を占め、とりわけ白化粧緑彩茶碗が大半を占めていることがわかる。大坂で豊臣後期に盛行したものであり、ここで共伴する土師器皿の年代が 11A (1590 ~ 1620) であること (尾野・平尾 2018) を勘案すると、これらも 16 世紀末から 17 世紀初頭の所産であるとみることができよう。また、特筆すべきこととして素地や匣鉢が出土していることが挙げられる。ここでの出土は窯出しの状況をそのまま反映したような状況であり、軟質施釉陶器においても同様であったと考えるむきがあるかもしれない。しかし、軟質施釉陶器は内窯で数個体ずつ焼成するものであり、匣鉢ごと当該地点に持ち込む必要はない。加えて、本焼き前の素地を持ち込む必要は全くない。このことから、当該地点において軟質施釉陶器が生産されていた可能性を想定することが可能となる。

なお、青織部風平向付は単体での出土であり、厳密な廃棄年代を想定することはできない。

弁慶石町出土陶片の遺構間接合

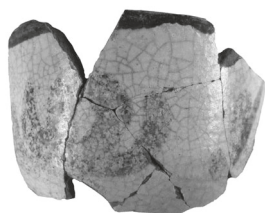
京都市による整理調査により、遺構単位を超えた接合を経て、311 点の形状が判明するものを抽出された。そのうち、複数の遺構から出土した陶片が接合するもの (遺構間接合) は 33 点 (10.6%) であり、比率は高いことがわかる ³⁾。

遺構間接合が確認できる 33 点のうち、SK41 は 21 点、SK76 は 8 点、SK77 は 10 点、SK152 は 6 点、SD75 は 4 点、SK36 は 3 点、以下 2 点が SK29、整地層、SX33、以下 1 点が石組、石組掘り方、石敷き、整地層砂礫、路地、SE2、SK2、同 25、同 26、同 32、同 37、同 40、同 63、同 75、同 211、同 330、SD30、同 56、SR26、SX32 と 29 の遺構から出土していることがわかる。2 つの遺構から出土したものが接合する事例が最も多いが、多いものでは 4 つの遺構から出土したものが接合している事例がある。

これらを詳細にみても興味深いことがわかる。SK41 と接合関係にあるものとして SK76、同 77、同 152 などがあり、21 点にのぼる (遺構間接合事例のうち 63.6% を占める)。また、SK76 と SK77 は SK41 との接合関係は顕著 (13 点、遺構間接合事例のうち 39.3%、SK41 の遺構間接合事例のうち 61.9%) であるが、SK76 と SK77 との間に接合関係はない。また、SK152 は SK41 と SK77 とは接合関係 (5 点) にあるが、SK76 とは接合関係にない。このことから SK41 の接合関係は、SK76 の組み合わせと SK77・同 152 の組み合わせが存在することがわかる。実



指定 105

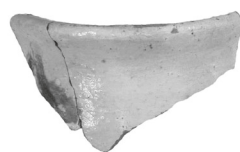


指定 118



指定 121

白化粧緑彩茶碗
内面黒色釉
外面白化粧+緑釉



指定 115 指定 116

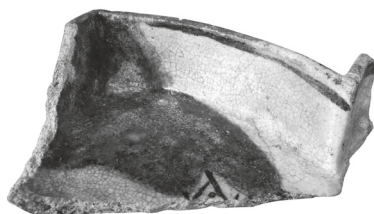
白化粧緑彩香炉
内面無釉
外面白化粧+緑釉



指定 122

白釉杯
降り物多く釉は縮
れており、施釉は
厳密には不明

赤褐色系素地の資料群



指定 107



指定 129

青織部風平向付
内外面に緑彩+錆絵
型成形



指定 120

白釉緑彩茶碗
外面に緑彩+彫り
内外面に白釉



指定 126

白化粧茶碗（素地）
外面白化粧
赤褐色系素地



指定 130
匣鉢

白色系素地の資料群

当該地点での生産を想起させる資料群

図 3 弁慶石町出土軟質施釉陶器

際の遺構を見てみると、裏庭と考えられる地点においてSK41が東側にありSK76と77は西側に隣り合う位置にある。にも関わらず、この後2者は互いに干渉を与え合わないのである。この点は、弁慶石町における遺構の形成プロセスを考える上で極めて重要である。

さらに興味深い点がある。ほぼ同時期の遺構と考えられるもののうち、出土量の多いSK41、同76、同77、同152を軸とした接合関係からは距離を置いた遺構群が散見されSK170をその一例として挙げることができる。どちらかの遺構群が完全に埋没したり掘り返されたりしないなど全く異なる局面（Phase）にあると想定できるのである。

以上のことからSK41と接合関係にあるものをPhase1とし、SK76との組み合わせをPhase1-1とし、SK77・同152との組み合わせをPhase1-2とする。SK170など同時期の遺構とみられるものの、Phase1の遺構群と全く接合関係にないものをPhase2とする。

Phaseの組成と特徴 弁慶石における遺構の変遷

先に設定したPhaseの組成をみることにしよう。

Phase1からは土師器皿や明染付などを除く大半がいわゆる桃山陶器（とりわけ茶陶）で占められている。

一方Phase2のSK170からは軟質施釉陶器碗と黄瀬戸向付はあるものの大半は美濃の碗皿で占められ、茶陶は基本含まれない。加えて、Phase1の遺物（とりわけ焼締袋物）には融着や亀裂の入ったものが多く含まれ、窯出しの状態のまま弁慶石町に持ち込まれた窯買いの状況を示すものと考えられるが、Phase2の遺物にはそのような状況は看取されない。

つまり、2つのPhaseは廃棄されるものの組成がそもそも異なり、かつ、その背景にある状況も大きく異なる可能性が極めて高いと言えるのである。

三条瀬戸物屋町の特徴は、仕様書を窯場に送って個性ある製品を作らせていたことと、窯買いによって独自の審美観に基づいて製品を抽出するところにあるといえる（畑中2020）。弁慶石町においてそれに相応する「三条瀬戸物屋町らしい」陶片が出土する遺構はSK41・76・77である。つまり、Phase1の遺構群から出土するものである。これらの陶片が出土した遺構が位置する裏庭は、選別の場としての機能を持っていたと考えることができるだろう。

一方、先行すると考えられるPhase2の遺構群からは、「三条瀬戸物屋町らしい」陶片ではなく、ありふれたデザインの日用雑器で占められている。つまり、明らかに場の機能が異なっていたことがわかる。

このことから、確実に陶磁器を商っていたと考えることができるのはPhase1であり、先行する同2においては異なる場であったことがわかるのである。

では、Phase2においては、弁慶石町の裏庭は如何なる場であったのだろうか。それを想定し得るものとして、遺構間接合の事例がないものの特徴的な在り方をしている軟質施釉陶器を取り上げよう。

弁慶石町からは20点以上の軟質施釉陶器が出土している。一つの地点から出土する量としては比較的多いと言える。内訳は、Phase1から1点のみ出土し、その他の20点以上はPhase2のSK170をはじめとした遺構から出土している。先に述べたように、後者からは素地や匣鉢も出土しており、ここで軟質施釉陶器がつくられていた可能性は否定できない。全ての軟質施釉陶器がPhase2のものであるかどうか、また、全てのものがここで作られたかどうかは明らかにし得ないところはあるが、このPhaseにおいて軟質施釉陶器が取り扱われていたことは指摘できよう。

このことから、軟質施釉陶器を作っていた可能性を含みつつPhase1とは異なる様態で陶磁器を取り扱っていたことを想定できよう。

(2) 中之町 中之町の概要

平成元年度（1989）に共同住宅建設工事に伴う立会調査において、三条通りに面した屋敷地の裏側において井戸、方形の石組遺構、土坑が検出された。出土品の中には製品に窯道具が付着したままのものや窯道具そのものも一定量みられる点と、本来ならば揃えて用いられる向付が単体で出土している事例が多いことから、窯場から直送され選別して販売された痕跡であろうと考えられている（尾野・平尾2018）

陶片は、美濃の施釉陶器が全体の8割を占める。これらは土岐市元屋敷窯で生産されたものであると考えられている。これらの他には、信楽、土師器、中国や東南アジアからの輸入陶磁器がみられる。

美濃は志野（茶碗・沓茶碗・茶入蓋・水指・皿・向付・大鉢・香炉・香合蓋・灯明具・火入）・鼠志野（茶碗・茶入蓋・向付・鉢・皿）・青織部（茶碗・茶入蓋・水指・建水・向付・大鉢・手鉢・合子・香合・灯明具）・鳴海織部（碗・沓茶碗・向付・角鉢）・黒織部（沓茶碗）・総織部（茶入蓋・向付・灯明具）・志野織部（碗・沓茶碗・茶入蓋・水指蓋・皿・向付・鉢・合子・灯明具）・白釉（茶碗・向付）・長石釉（碗・杯・皿・香炉）・鉄釉（茶入・茶壺・碗・杯・皿・灯明具）・美濃伊賀（水指・花入）・美濃唐津（茶碗・向付・杯・灯明具）、信楽は水指、土師器（皿・焙烙）、明染付、粉青沙器の壺、東南アジア産とみられる甕・壺蓋などがみられる。本稿で取り上げる軟質施釉陶器は、青織部風の向付や鉢、華南三彩や高麗茶碗を模したものなどに加え、素地がみられる。

土師器の年代観などから元和年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられている（尾野・平尾 2018）。

中之町出土の軟質施釉陶器

中之町から出土した軟質施釉陶器には以下のものがある。その概要についてふれることとする（図 4、5）。

緑釉茶碗（892）

茶碗素地（891）

小杯（893）

華南三彩風皿（900）

褐釉台付皿（894）

緑彩皿（895、901、902）

皿素地（896～899）

青織部風向付（903、905、906、908、909、911～913）

青織部風筒向付（915、916）

青織部風鉢（919）

緑釉向付（904、907、910）

錆絵染付平向付（914）

鉢素地（917、918）

合子蓋（920）

このようにみても、茶碗は少なく、向付や皿が大半を占めていることがわかる。とりわけ緑釉を掛け付けて錆絵染付で図文を描く青織部風のものが多くみられる。ここでも弁慶石町と同様に素地が出土している。このことから、当該地点においても軟質施釉陶器生産が行われていた可能性を想定することが可能となる。

ここで共伴する土師器皿の年代が 11B（1620～1650）であることを勘案すると、これらも 17 世紀前半の所産であるとみることができよう。

ただし、当該地点においては立会調査が行われているのみで、遺構との関係は厳密にはし得ず、これ以上の論理展開は容易ではない。

3. 三条瀬戸物屋町出土軟質施釉陶器の論点

最後に三条瀬戸物屋町から出土した軟質施釉陶器の論点について整理し、稿を結ぶこととする。

軟質施釉陶器の年代観

京都における事例は遺跡そのものの情報が乏しかったり共伴する資料が提示されていないものが多く実態を明らかにするには今少し時間を要する。

慶長年間後半を中心とする時期に廃棄されたと考えられる弁慶石町においては、白化粧・緑彩を施し内面に黒釉を掛ける碗や青織部風の向付がみられる。元和年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられる中之町においては、華南三彩風の皿や盤、鳴海織部風の鉢、青織部風の筒向付や鉢、高麗茶碗風の茶碗などがみられる。弁慶石町における状況は大坂での在り方と共通するものであ

るが、中之町における状況は比較資料に乏しいことから確言することは難しいが前者以降のものである可能性は高い。故に、今後のさらなる検討を要するとはいえ、慶長年間に白化粧・緑彩を施し内面に黒釉を掛ける碗が盛行し、続く元和年間にはそれらは姿を消し多様な形態のものがみられるようになる流れを想定することができる。

軟質施釉陶器生産の場とその在り方

弁慶石町では素地と匣鉢が、中之町では素地が出土している。発掘・立会調査では窯そのものは確認されていないが、この場で軟質施釉陶器が生産されていたことを想定し得るものである。

中之町は立会調査によって得られた資料であることから検証は困難であるが、弁慶石町については発掘調査によって得られた資料であることと、その後の整理作業が一定進んでいることから遺構の変遷が概ね明らかとなり、軟質施釉陶器の生産がどの局面で行われていた可能性があるか言及することができる。

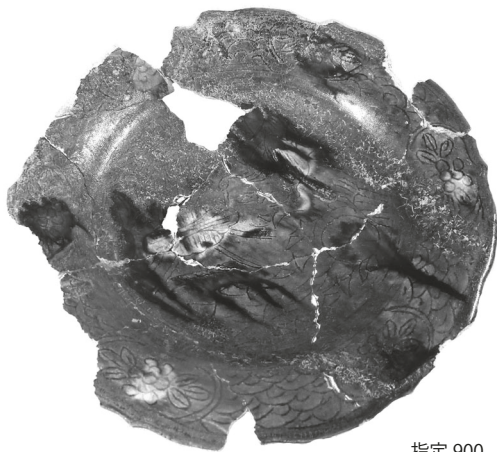
弁慶石町では信楽や備前の水指・建水などの袋物を窯買いしていた段階（Phase1）に先行して、軟質施釉陶器を生産していた段階があった可能性（Phase2）がある。ここから 16 世紀末から 17 世紀初頭の時間幅の中で、軟質施釉陶器を生産していた段階から窯買いをしていた段階へと移り変わっていると見ることができる。つまり、これらは同時に行われていない可能性があり、陶磁器を商っていた三条瀬戸物屋町における業態のあり方を極めて部分的ではあるが明らかにしたものであると言える。

青織部風の軟質施釉陶器

先に述べたように三条瀬戸物屋町から出土した青織部風の軟質施釉陶器が美濃産の青織部に先行する可能性が指摘されている点についてふれておこう。

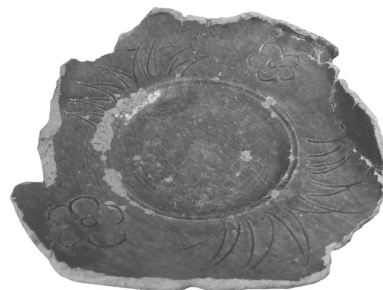
元和年間を中心とする時期に廃棄された中之町の陶片の中の軟質施釉陶器は青織部風のもものが主となっている。それに先行する慶長年間を中心とする時期に廃棄された弁慶石町の陶片の中には僅かにそれがみられる。ただし後者の出土遺構の詳細を検討した結果、共伴する資料に乏しく慶長年間を中心とする時期に廃棄されたものであると確言することは難しい。つまり、慶長年間（の後半）につくりはじめられた美濃産青織部の祖形論の根拠にはし難いことがわかる。とはいえ、豊臣後期に属する大坂城跡（OS87 - 40 次）焼土層から青織部風軟質施釉陶器向付が出土している（土岐市美濃陶磁歴史館 1994）ことから、やはり慶長年間から青織部風軟質施釉陶器が存在していたことがわかる。

では、尾野氏が指摘するように量産的ではない軟質施釉陶器青織部風が量産的である美濃産青織部に先行し、その祖形になったと言えるのだろうか。実は消費地の事

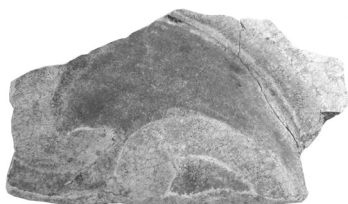


指定 900

華南三彩風皿
内外面緑釉
内面花鳥文線彫＋褐釉・黄釉
輪高台



指定 894
褐釉台付皿
内外面褐釉
内面草花文線彫



指定 895

緑彩皿
内外面白釉
内面緑彩



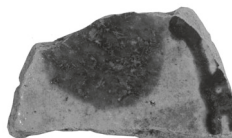
指定 904

緑釉向付
内外面緑釉



指定 906

青織部風平向付
内外面白釉
内面に緑彩＋錆絵
ロクロ成形のち口縁部変形
三足



指定 903

青織部風向付
内外面白釉
内面に緑彩＋錆絵



指定 905

白色系素地の資料群

図4 中之町出土軟質施釉陶器（1）

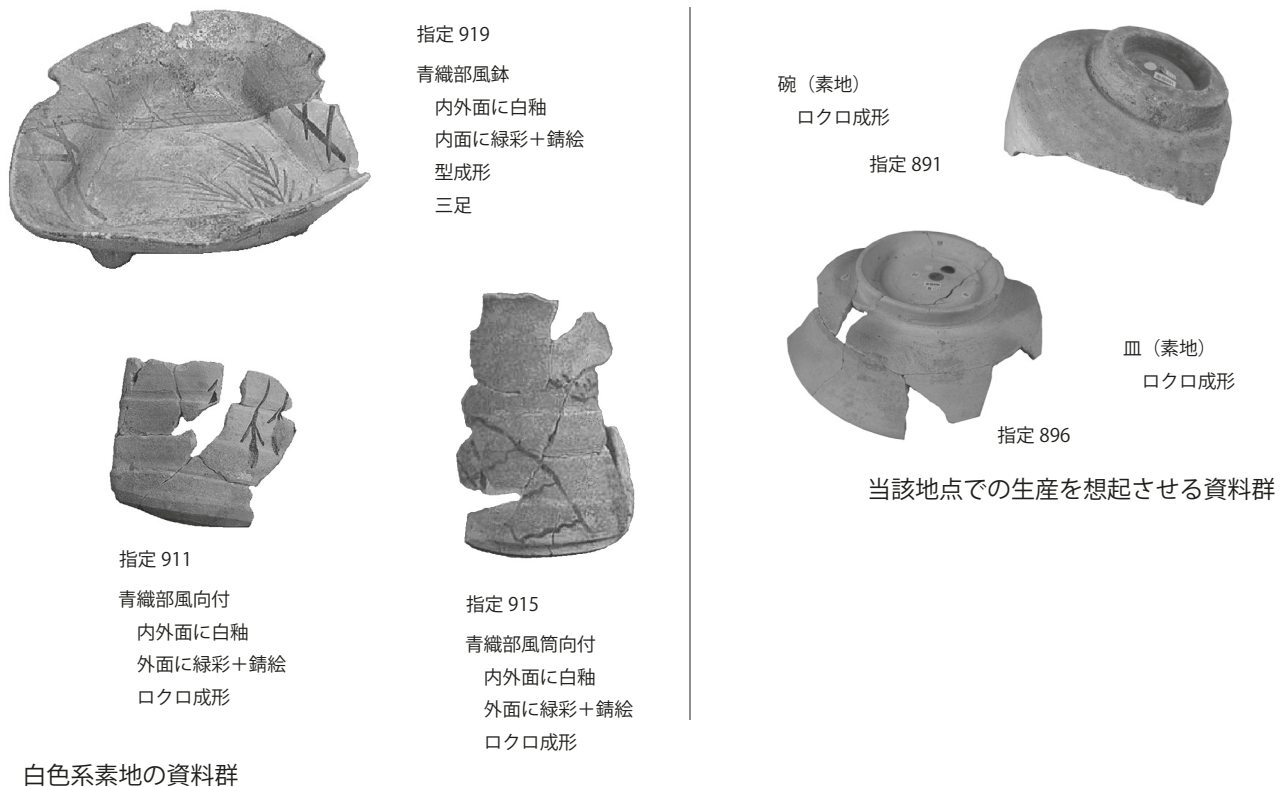


図5 中之町出土軟質施釉陶器 (2)

例からは、美濃産青織部が出現する慶長年間（の後半）には器体を赤色と緑色の肩身代わりにした鳴海織部が大坂や堺の年代の明らかな遺構から出土しており、確実に存在しているのである。にも関わらず（技術的には可能であるはずだが）鳴海織部風の軟質施釉陶器は現時点で出土していない。美濃産青織部は軟質施釉陶器織部風の模倣で、美濃産鳴海織部は独自に作り出されたということになるのだろうか。口頭での発言ではあるが、ルイズ・アリソン・コート氏は、軟質施釉陶器青織部風が美濃産青織部の祖形であるならば何故美濃の窯場から手本となる軟質施釉陶器が出土しないのかと指摘する。つまり、このようにモノの有無だけで立証することは余程のことではない限り容易ではないのである。

そもそも、ものづくりにおいて発注がかけられる際に実物の見本が必要なのであろうか。精巧な実物さながらの様が求められるものもあるかもしれないが、イメージを簡単な形にした切型のような仕様書があれば十分なのではないか。ここでは実物の見本に拘るが故に、その有無が議論の俎上にのぼり仕様書でやりとりされていた可能性を排除してしまったことと、そもそも陶磁器の編年の最小単位の幅の中での前後関係を議論したところに、軟質施釉陶器青織部風の存在が解決しない迷宮に落ち込まれた感は否めない。

なお、量産に適した美濃産のものが流通している元和

年間にあっても中之町からの出土軟質施釉陶器青織部風がつくられていたと捉える事が可能となり、両者は前後関係にあるというよりも、異なる価値体系のもとでつくられていたとみるのが穏当なのではないだろうか。

三条瀬戸物屋町の軟質施釉陶器

以上にみてきたように、三条瀬戸物屋町から出土した軟質施釉陶器は発掘調査によって得られた資料ではない中之町と発掘調査は実施されたけれども基本的な情報が提示されていない弁慶石町といったように、通常の考古資料の分析に耐えることのできる情報を持ち得ていない。

その中で、弁慶石町については陶片の出土遺構を資料に直接あたり検討することによりその大要を掴み、かつ遺構間接合の状況を把握することにより場の変遷があった可能性を指摘し、信楽や備前から窯買いをして選別した局面に先行して軟質施釉陶器を作っていた局面があることを想定した。

また、慶長年間に廃棄されたと考えられる弁慶石町では白化粧・緑彩を施し内面に黒釉を掛ける碗を主として青織部風の向付が見られ、元和年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられる中之町においては、華南三彩風の皿や盤、鳴海織部風の鉢、青織部風の筒向付や鉢、高麗茶碗風の茶碗などがみられる。元和年間の良好な比較

資料は乏しいことから、まずはこれらを基準資料として、今後の資料の増加を待つことになる。

軟質施釉陶器青織部風のものとは美濃産青織部との前後関係については、現在の資料の在り方からは明らかにし得ないことが判明したとともに、量産に適した美濃産のものが流通している元和年間にあっても軟質施釉陶器青織部風がつくられていたことになり、前後関係というよりは異なる価値体系のもとでつくられていたと考える方が穏当であろう。

以上、三条瀬戸物屋町から出土した軟質施釉陶器の論点について資料の在り方から再検討を試みた。大きな問題は、遺跡の在り方を基本的な考古学資料として取り扱っているか否かというところにある。今一度、遺構・遺物の検討を行った上で解釈を試みる必要があるだろう。

註

- 1 天正 13 年（1585）の天正大地震に伴うとされる長浜城下町下村藤右衛門邸の焼土層からは軟質施釉陶器の灰匙が出土している（長浜市 2002）が、出土状況そのものが明らかではないところがあるので、本稿では慶長年間を遡る根拠の一つにはしない。
- 2 慶長年間末年には生産されている青織部や慶長 19 年（1614）開窯の高取内ヶ磯窯の陶片を含まないことを慶長年間に収まる根拠としているが、出土資料の場合「存在しない」ことを証明するのは至難の技である。これらの陶片陶器商の生業に由来するものであるならば、なおのこと商店の個性が反映されるはずであることから、本稿ではこれらの陶片が出土していないことを年代の根拠とはしない立場をとる。
- 3 遺構間接合の検討については全ての発掘調査において行われているものではなく、数値として位置付けることはできないが、本事例は比率が高いものと考えられる。緊急発掘調査においてはこういった十分な整理調査を行うことが予算的に困難なことが多い。発掘調査や整理調査において本来行うべきことのより一層の周知と理解が必要である。なお、遺構間接合の検討については西森正晃氏（京都市文化財保護課）、下村奈穂子氏（根津美術館）、倉澤佑佳氏（福井県陶芸館）とともにいった。

参考文献

- 尾野善裕「畿内における「軟質施釉陶器」の出現」『軟質施釉陶器の成立と展開 研究集会資料集』関西陶磁史研究会、2004 年。
- 尾野善裕・平尾政幸「「桃山陶器」流行年代考」『中近世陶磁器の考古学』第八巻、雄山閣、2018 年。
- 木立雅朗「軟質施釉陶器の生産と窯構造」『軟質施釉陶器の成立と展開 研究集会資料集』関西陶磁史研究会、2004 年。
- 小森俊寛「初期京焼」『陶説』433 号、特集・洛中出土の茶陶、日本陶磁協会、1989 年。
- 佐藤隆「大阪周辺における軟質施釉陶器の生産と流通」『軟質施釉陶器の成立と展開 研究集会資料集』関西陶磁史研究会、2004 年。
- 鈴木裕子「もう一つの織部－軟質施釉陶器－」『美濃のやきもの－黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の系譜－』佐野美術館、1999 年。
- 土岐市美濃陶磁歴史館編『続・桃山の華 大坂出土の桃山陶磁』特別展図録、土岐市美濃陶磁歴史館 1994 年。
- 永田信一「軟質施釉陶器の諸問題」『軟質施釉陶器の成立と展開 研究集会資料集』関西陶磁史研究会、2004 年。
- 長浜市教育委員会『長浜市埋蔵文化財調査資料第 42 集 長浜町遺跡第 1 次・第 2 次・第 18 次発掘調査報告書』2002 年。
- 西森正晃「三条瀬戸物屋町と京都出土の桃山茶陶」『新・桃山の茶陶』根津美術館、2018 年。
- 根津美術館編『桃山の茶陶』根津美術館、1989 年。
- 畑中英二「三条瀬戸物屋町出土の水指・建水・花入」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』63 号、京都市立芸術大学美術学部、2019 年 a。
- 畑中英二「桃山陶器の図文からみた三条瀬戸物屋町」『中近世陶磁器の考古学』第十一巻、雄山閣 2019 年 b。
- 畑中英二「京都三条瀬戸物屋出土陶片－その問題の所在－」『根津美術館紀要 此君』第 11 号、根津美術館、2020 年。
- 平尾政幸「三条瀬戸物屋町出土陶磁器群の年代観について」『新・桃山の茶陶』根津美術館、2018 年。
- 松尾信裕「大阪出土の桃山陶器」『桃山の華』土岐市美濃陶磁歴史館、1993 年。
- 村上武「編集後記」『陶説』433 号、特集・洛中出土の茶陶、日本陶磁協会、1989 年。
- 森殺「豊臣期大坂の美濃桃山陶」『第 12 回土岐市織部の日 特別展 豊臣期のやきもの 大坂城出土の桃山陶器』土岐市美濃陶磁歴史館、2000 年。
- 森村健一「考古学から見た安土・桃山茶陶－堺出土の軟質施釉陶器－」『羽衣國文』第 13 号、羽衣学園短期大学国文学会、2000 年。
- 樂吉左衛門『樂ってなんだろう－樂焼創成－』淡交社、2001 年。

